

言葉のかたち

ブックデザイナー

名久井直子

電話の向こうから、可愛らしい声で「明日またね」と言われたら、ちよつとうれしい気持ちができる。仕事相手の編集者から「明日またね」と言われたら、なんだか気が重くなる。同じ言葉でも、相手が誰であるか、そして声音は重要な情報だと言えます。

メールで届いた文章が、たまにとでも怒っているように感じられる時があつて、でも話してみるとそうでもなくて、ただの質問だった、というようなこともあります。強弱のないテキスト表示の画面では、プラスアルファの情報はないのです。

本屋さんを想像してください。そこにはたくさん本があつて、いろんな文字があなたに訴えかけてきます。でも、メールと違って、きつと、「これは怖そう」「これは面白そう」「これはしんみりしそう」というように、なんとなく何かを感じ取っている筈です。それはもちろん、帯にあ

る惹句^{じまぐ}の助けもあるし、全体の絵や写真の印象もとても重要ですが、実はタイトルの見え方も、大いにイメージの手助けになっているのです。書体の種類や、大きさ・色、文字と文字の間隔、縦書き？

横書き？そしてそれが本のどこに配置されているか。太いゴシック体が、これでもか！と大きく配されたタイトルは、エンターテインメント性を感じさせたり、骨太な印象も与えます。細めの優美な明朝体がさりげない大きさと並んでいたら、繊細な心情を描いているイメージ。丸つ

こい可愛い書体で、ポップな色味だったら、子ども向けか、若い女性を意識したものかもしれません。様々な要素との組み合わせなので、答えは一つではありませんが、デザイナーはなるべくその言葉の声音が伝わるように、どんなかたちが相応しいか考えて作っています。

言葉をかたちにするのは、本の外側だけの話ではなくて、内側の本文ページ、小説などの内容そのものにも関係してきます。ゆつたりと余韻を感じるような内容の詩が、辞典のようにみっちり組まれていたら、どんな感じがするでしょう。ちよつと、感動が減っちゃう気がしませんか。

誰かの頭の中で生まれた言葉が、文字というものに変換されて、保管ができる言葉になり、それをさらに、その言葉にとって良いと思われるかたちで、本にする。そうやってかたちを与えられた言葉は、時間を超えて、誰かに渡すことがで

けるとキリがないのですが、そのうちの一つが、著者がテキストを修正する過程を見られるということです。ある小説は、文芸雑誌に掲載されていたときは、あんな結末だったのに、ちよつと違ったこんな結末になっていて、二度楽しいと思ったり、新たに書き足されたことには、読者としても喜びがあるし、削除されたことには、その意図を汲み取って感心をする、というなかなか普通の人は体験できない瞬間に触れさせてもらっています。

ブックデザイナーの仕事をしていると、うれしい瞬間が折々にあつて、読者よりも早く作品が読めるとか、（ミューハーですが）憧れの作家や画家、いろんな分野の方にお会いできるとか、出来上がった絵の原画を見ることができるとか……挙

名久井直子
なくいなおこ

1976年、岩手県生まれ。ブックデザイナー。武蔵野美術大学卒業後、広告代理店勤務を経て、2005年独立。デザインを手がける本は、小説、絵本、児童書など、多岐に渡る。第45回講談社出版文化賞ブックデザイン賞受賞。主な仕事に、『島はぼくらと』（辻村深月／講談社）、『宇野亜喜良クロニクル』（宇野亜喜良／グラフィック社）、『せかいのねこ』（ヒグチユウコ／白泉社）、『あたしとあなた』（谷川俊太郎／ナナロク社）など。

子どもの頃から、気づかないうちに、絵本や、幼年童話や、冒険小説、いろんな本に触れる時代を経て、今もきつとあなたのお手元に何か本があるかと思えます。新しい本との出会いが楽しいものとなるように、本屋さんで、言葉に耳を傾けていただけたら、うれしく思います。

忘れないのは、ある海外絵本の日本語版を作ったとき。翻訳が江國香織さんだったのですが、子ども向けの、とても短いテキストなのに、少しだけ（てにをは）のようなものを直す赤字がきて、それだけで、ぐんと文章が命を持つて立ち上がる。パソコンの画面で文字を直した瞬間に、あまりの感動に涙がこぼれました。こういうことを目の当たりにすると、言葉のもつ力を、とても強く感じるし、大事に本を作らなくては、と身が引き締まる思いがします。